

# 小学校におけるローマ字指導の現状と課題 — 英語科と国語科の連携を視野に入れて —

堀由紀・アシュール真弓・拝田清

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景

英語を苦手とする児童・生徒は共通してローマ字にも問題や苦手意識を抱えていることが多い。経験上、この種の相関性は同僚教員と共有されるのだが、その因果関係については一致を見ない。ある教員はローマ字を習った上でアルファベットを学ぶから混乱が生じるのだと指摘し、またある教員はローマ字の指導は英語教育の阻害要因となるので、ローマ字指導は不要だとさえ言う。一方で、英語を苦手とする生徒にローマ字指導を行い、ローマ字を音声化して読めるようになると英単語も音声化して読めるようになると主張する中学校教員もいる。前者については、山本・池本 (2017:39) が以下のように指摘している。

従来4年生での取り扱いであったローマ字学習が3年生へと変更され…4年生以降もコンピュータ入力のため繰り返し指導されるなど、ローマ字は以前より重点的な取扱いへと変容し…その結果、ローマ字学習の英語学習への悪影響が以前より顕著になるという皮肉な展開を見せつつある。

また、後者については、ローマ字の知識が英単語の筆記能力に貢献し、入門期の英語学力に貢献しているという指摘 (松浦 2005:82-83) や、ローマ字指導がアルファベット文字知識の素地を養い、読み書きのレディネスを形成するという先行研究がある (銘荊 2020)。

実際のところ、小学生に指導されるローマ字には、訓令式、ヘボン式、そしてパソコン入力式<sup>1</sup>の3種類があり、さらに小学校中学年の外国語活動から英語のアルファベットが導入される。同じラテン・アルファベットを使用しながら、文字の読み方が異なるため、児童が混乱をきたすことが容易に想像される。高松・浦野 (2019:65) は「小中学校の現場、特に小学校に英語教育が導入される以前の中学校1年生の授業をする英語教師たちからは、訓令式とヘボン式の混在がもたらす生徒の混乱が指摘されていた」とする。前出の山本・池本 (2017:39) でも、以下のように言及されている。

中学校英語科教員の間では、小学校で習う訓令式ローマ字と、中学校英語科で使用するヘボン式ローマ字が一致しないことは以前より問題視されていた。小学校外国語活動が開始したため近年では、小学校現場においても、訓令式とヘボン式が混在することの弊害が指摘されるようになってきた。

<sup>1</sup> キーボードを使用してのPCやタブレットへの日本語入力では、たとえば「ん」を表示するためには「N」を2回打つというように、通常のローマ字表記とは異なるため、本稿では便宜的に「パソコン入力式」と呼ぶこととする。

混乱の要因と疑われることは他にもある。現状、小学校の国語科でローマ字が導入されるのは小学校3年生であるが、同時に大文字と小文字を使つての読み書きが指導される。また、一部の検定教科書では、大文字と小文字のアルファベットの一覧表が付されているものもある。

一方、小学校中学年で始まる外国語科活動では、3年生で大文字が、4年生で小文字が導入される。この段階では書くことは求められないが、アルファベットの形と読み方を一致させることが求められている。そして高学年（小学校5、6年生）での外国語科では、アルファベットを書くことが導入される。同じラテン・アルファベットを一方は「ローマ字」と呼んで小学校3年時に大文字と小文字を書かせ、一方は「アルファベット」と呼んで大文字を小学校3年時に、小文字を小学校4年時に指導し、そして5年時以降で書かせることにしているわけで、この大文字と小文字の導入時期と指導内容の差を「矛盾」と形容する児童英語教育者も存在する（鹿間 2021）。

我々の最終的な興味・関心の対象は「英語を苦手とする児童・生徒は共通してローマ字にも問題や苦手意識を抱えている」という経験知の因果関係を明らかにすることである。しかし、それ以前に、上述のような状況を、とりわけ2020年4月以降の新学習指導要領の実施に際して、現場の教員はどのように受け止め、そして対応しているのかを明らかにする必要がある。また、学習指導要領では教科間の連携の必要性を求めているが、少なくともローマ字とアルファベットの導入時期と指導方法についてはそれが実現できているようには思えない。そもそも、なぜ訓令式やヘボン式など、ローマ字が複数存在するのか、また、実際上の問題としてローマ字は必要なのだろうかといった根源的な問いも立ち現れてくる。そこで本研究では、小学校におけるローマ字指導の現状と課題を明らかにしつつ、英語科と国語科の連携のありかたについても問題提起したいと考える。

## 1.2 研究の目的

上述の問題意識より、本研究の目的を以下の3つに設定する。

- (1) ローマ字成立の経緯を明らかにする。
- (2) ローマ字とアルファベットの指導実態を明らかにする。
- (3) 国語教育と英語教育の連携の方向性を明らかにする。

## 1.3 研究の方法

上記「研究の目的」を達成するため、本研究では以下の方法を取ることとする。まず、ローマ字成立の経緯を明らかにするため、第2章ではローマ字の成立過程を通時的に見ていくこととする。次に、ローマ字とアルファベットの指導実態を明らかにするため、第3章において国語科と英語科それぞれについて、学習指導要領での扱いを精査し、加えて小学校教員に対して質問紙調査を実施し、現場での受け止め方や対応について整理していくこととする。そして、続く第4章では、国語教育と英語教育の連携の方向性を明らかにするため、第2章と第3章の議論や知見を踏まえて、国語教育と英語教育の連携のあり方について検討し、現段階での提案を行いたい。

なお、既述のように我々の究極の目的は「英語を苦手とする児童・生徒は共通してローマ字にも問題や苦手意識を抱えている」という経験知の因果関係を明らかにすることであるが、紙幅の関係上、こちらは稿を改めて検証、および議論する予定であることをあらかじめお断りしておく。

## 1.4 用語の定義

### (1) 「ローマ字」とは

ローマ字はラテン文字とも呼ばれ、1字が1音素または1単音を表す音素文字である。ローマ字は音素を表記する表音文字であるため、異なる言語の表記に広く使用される。

ラテン文字がその由来とするラテン語は、当初はイタリア半島中部のラティウム地方（ローマを中心とした地域で、現在のイタリア・ラツィオ州に該当する）で用いられた言葉であったが、この地域の人々がやがてローマ帝国を建設し、その公用語としてラティウム地方の言葉、すなわちラテン語が広く用いられるようになった。ラテン語を表記するラテン文字の成立は、古代ギリシア人がフェニキア文字からギリシア文字を作り、このギリシア文字からラテン文字がつけられたという経緯である。ラテン語が古代ローマ帝国の公用語であることから、ラテン文字がローマ字とも呼ばれるようになった。

さて、ローマ字は音素を表記する表音文字であるため、世界の様々な言語の表記に広く使用されることは既述の通りである。たとえば、ローマ字〔ラテン文字〕を用いて英語を表記することもできれば、ローマ字を使い日本語を表記することもできるわけである。

問題となるのが用語使用の曖昧さで、ローマ字を使い日本語を表記するのは正式には「ローマ字綴り」あるいは「ローマ字表記」なのだが、慣用として単に「ローマ字」と略される場合があり、文字としての名称と表記法としての名称が混同・混用されることがある。本稿では、文字としての名称を「ローマ字」とし、表記法について言及する場合は「ローマ字表記」で統一することとする。

### (2) 「アルファベット」とは

語源的にはギリシア文字の第1番目の文字である $\alpha$ （アルファ）と第2番目の文字である $\beta$ （ベータ）から「アルファベット（Alphabet）」と呼ばれるようになった。音素文字であるローマ字〔ラテン文字〕で英語を表記する場合、そのローマ字〔ラテン文字〕を慣用上から「アルファベット」と呼んでいる。本稿では、文字としての名称を「アルファベット」とし、表記法について言及する場合は「アルファベット表記」で統一することとする。

### (3) 「ヘボン式」と「日本式」

米国人宣教師・医師であるヘボン（James Curtis Hepburn, 1815-1911）が1867（慶応3）年に日本で最初の和英辞典『和英語林集成』を編集した際、日本語の見出しをラテン文字〔ローマ字〕で表記した。これをもとに1885（明治18）年にローマ字表記の推進団体である羅馬字会（ろーまじーかい）が修正提案した表記体系をヘボン自身が1886年刊行の『和英語林集成』の第3版で採用して以降、「ヘボン式ローマ字」（『広辞苑 第7版』では「標準式（ヘボン式）」と表記している）と呼ばれるようになった。

一方で、英語の音声寄りと言える「ヘボン式ローマ字」に異を唱え、日本語の音韻を正確に表記できるとして物理学者の田中館愛橘が提唱したのが「日本式ローマ字」である。

### (4) 「訓令式」とは

正式には「訓令式ローマ字〔訓令式ローマ字つづり〕」で、ヘボン式ローマ字と田中館愛橘が考案した日本式ローマ字を折衷したローマ字表記法である。1930（昭和5）年に、文部省に設置された臨時ローマ字調査会の答申に基づき、1937（昭和12）年に内閣訓令として公布されたため、「訓令式」と呼ばれている。なお、1954（昭和29）年にこの訓令は廃されて、当初の「訓令式」は改訂を加えられ再び告示された。

## 2. ローマ字表記の成立過程

### 2.1 ローマ字の伝来と発展

文字としてのローマ字がはじめて日本にもたらされたのは、室町時代の後半（16世紀後半）にキリスト教の宣教師によるものとされている（古藤 1997:118-119）。1590（天正18）年にイタリア人アレッサンドロ・ワリニャーニ〔ヴァリニャーノ〕が帰国する天正遣欧少年使節を伴い、肥前加津佐（現在の長崎県南島原市加津佐町）にグーテンベルク印刷機をもたらしたのを契機に、キリシタン版と呼ばれるローマ字書き日本語の文献が50点以上刊行されることとなった。日下部（1977:347）によると、「そのつづり方は、ポルトガル・イスパニアの正書法を手本とする当時の日本語の転写法であった」という<sup>2</sup>。

いわゆる「鎖国」後は、オランダ式・蘭学式のローマ字表記が使用された。たとえば「ハ行」は‘h’と‘f’で転写され（日下部 1977:349）、また、「ラ行」は‘l’で転写されていた（杉本 1998:549-550）。

シーボルト（1840）の『日本』では、ドイツ式表記が使われている。具体的には、ラ行音には‘r’と‘l’が併用されていた（日下部 1977:349）。

明治維新前後は英学隆盛を背景に米国人ヘボンの辞書『和英語林集成』（1867）が広く使用されていたため、英語式ローマ字表記が主流となり、やがて今日のヘボン式ローマ字へと連なる。

## 2.2 ローマ字の必要性

### 2.2.1 明治維新时期

明治維新时期には学問知識の民主化を目指し、前島密による建白書「漢字御廃止之議」（1867〔慶応2〕）を嚆矢として、難解な漢字をなくし、かな文字やローマ字による表記が望ましいとされた。漢字に精通するには時間と労力が必要で、そのような時間を捻出できるのは庶民ではなく、裕福な上流階級（士族や貴族）の人間だけになってしまう。そこで、かな文字やローマ字で日本語を表記すれば、庶民階級でも様々な知識を得ることが可能になり、引いては学問の民主化につながるという考え方が根底にあった。

ローマ字表記の導入は、文明輸入の便宜の側面からも求められていた。たとえば、ローマ字、およびローマ字表記が普及すれば、タイプライターの使用が可能となる。また、西洋の新概念をいちいち漢語に翻案する手間を省き、直接導入することができる。さらに、哲学者の西周のように、ローマ字、すなわちラテン・アルファベットに馴染むことは、外国語〔英語〕学習を容易にするという考え方をするものも多かった。

### 2.2.2 ヘボン式と日本式の対立

「1.4用語の定義(4)」で「日本式」ローマ字表記の成立について触れたが、当初の「日本式」か「ヘボン式」かの議論は、「日本語の音韻意識のままに書き記す」のか「外国語に馴れた耳で日本語を書き分ける」のかといった対立でもあった（日下部 1977:357）。そ

---

<sup>2</sup> たとえば、地名の「平戸」は‘Firando’としていることから、ハ行頭子音は‘f’で、また、ラ行音は‘r’で転写していると判断できる。コリヤド(1632)の『日本文典』によれば、ハ行頭子音‘f’は「hのようにいう。しかし、そのhは完全なものではなく、fとhの間のもので、両唇を合わせて閉じるが、十分には閉じない」とされている。つまり、当時の日本語のハ行音は無声両唇摩擦音[ɸ]であり、それゆえ、室町時代（1516〔永正13〕年）の日本最初のなぞなぞ集と言われる『後奈良院御撰何曾』における「母には二度会えども父には一度も会わない。答えは唇」という「なぞなぞ」も成立することになる。

の後、日本語の表記方法の簡易化が「漢字数の制限」と「漢字仮名混じり表記」に収束していく中、ローマ字表記における「日本式」と「ヘボン式」の対立は、イデオロギーの対立といった様相を呈してくる（安田 2007, 杉山 2008）。田中館らの強力な働きかけもあり、自然科学に関係した官庁組織で次第に日本式ローマ字を採用するところが増え、結果的には、日本式がヘボン式を圧倒していった。1913年に中央気象台が日本式ローマ字表記を採用したことをはじめとして、1928年には海軍省が省内でのローマ字表記を日本式にするなどといった具合である（杉山 2008:72-73）。そして1936年に内閣訓令第三号で日本式を修正したローマ字つづりを告示し、いわゆる「訓令式ローマ字表記」が公布された。その後、太平洋戦争中を中心に、「敵性の文字」を扱うローマ字論者は、その民主主義的思想が国家にとって危険であるともみなされ、大きな圧力にさらされることになった（杉山 2008:76-77）。

### 2.2.3 訓令式とヘボン式の併用

第2次世界大戦後の敗戦国としての日本では、民主化の一環として「アメリカ教育使節団報告」（1946 [昭和 21]）によりヘボン式ローマ字表記の学習が推奨された。しかし、最終的には政治的判断が働き、国民の選択の自由を保証するという理由付けで、訓令式・ヘボン式・日本式のどれを教えるかは各学校の自由とされた。

1954（昭和 29）年、内閣告示・内閣訓令として、「常用漢字表」・「現代仮名遣い」・「送り仮名の付け方」・「外来語の表記」・「ローマ字のつづり方」が出された。これらの内、「ローマ字のつづり方」において、以下のような訓令・告示がなされた（以下は、文化庁のホームページより引用している<sup>3</sup>）。

内閣訓令第1号  
各官庁

国語を書き表わす場合に用いるローマ字のつづり方については、昭和十二年九月二十一日内閣訓令第三号をもつてその統一を図り、漸次これが実行を期したのであるが、その後、再びいくつかの方式が並び行われるようになり、官庁等の事務処理、一般社会生活、また教育・学術のうえにおいて、多くの不便があつた。これを統一し、単一化することは、事務能率を高め、教育の効果をあげ、学術の進歩を図るうえに資するところが少なくないと信ずる。

よつて政府は、今回国語審議会の建議の趣旨を採択して、よりどころとすべきローマ字のつづり方を、本日、内閣告示第一号をもつて告示した。今後、各官庁において、ローマ字で国語を書き表わす場合には、このつづり方によるとともに、広く各方面に、この使用を勧めて、その制定の趣旨が徹底するように努めることを希望する。

なお、昭和十二年九月二十一日内閣訓令第三号は、廃止する。

昭和二十九年十二月九日

内閣総理大臣  
吉田 茂

<sup>3</sup> URL : [https://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/roma/index.html](https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/roma/index.html) (2021年12月10日閲覧)

ところが、実際にローマ字表には訓令式を示した第1表とヘボン式の表記を補足する第2表が掲げられており、「ローマ字のつづり方 前書き」では、以下のように説明がされている。

#### ローマ字のつづり方 前書き

1. 一般に国語を書き表わす場合は、第1表に掲げたつづり方によるものとする。
2. 国際的關係その他従来の慣例をにわか改めがたい事情にある場合に限り、第2表に掲げたつづり方によってもさしつかえない。
3. 前二項のいずれの場合においても、おおむねそえがきを適用する。

つまり、結局のところ訓令式とヘボン式の併用を認めるということである。なお、ここで確認しておきたいことが2つある。1つは、この間の議論において、ローマ字を学習する側としての児童の負担や混乱に関する議論はほぼなされていないことである。もう1つは、この内閣訓令が出されて以降、すでに70年近くが過ぎようとしているが、改訂は一切されていないということである。

### 3 国語教育におけるローマ字指導

#### 3.1 学習指導要領における位置づけの変遷

昭和22年の学習指導要領(試案)では、全国の小中学校でローマ字の授業が行われることとなったが、ローマ字教育を導入するか否かは学校の責任者に一任された。原則として対象学年は4学年以上で、1年を通して40時間以上の授業を行うとされた。

昭和33年の改訂では、指導対象学年は4学年以上、簡単なローマ字の文章の読み書きが指導された。ローマ字指導に充てられた時間は、第4学年で年間20時間程度、第5学年と第6学年ではそれぞれ年間10時間程度であった。

昭和43年告示の学習指導要領では、指導対象学年は4学年のみとなり、指導目標は「第4学年において、ローマ字による日常ふれる程度の簡単な単語の読み書きを指導するものとする」と簡潔なものへと変わった。

その後、昭和52年、平成元年、平成10年、平成20年、平成29年と5回の改訂が行われ、平成20年の改定では対象学年が第4学年から第3学年に移行された。ここで平成20年の『学習指導要領解説』(2008)と平成29年の『学習指導要領解説』(2017)とを比較してみる。

平成20年告示『小学校学習指導要領解説 国語(第3章 第2節)』(文科省2008:88)では、ローマ字について以下のような記述がなされている。

ローマ字表記が添えられた案内板やパンフレットを見たり、コンピュータを使う機会が増えたりするなど、ローマ字は児童の生活に身近なものになっている。これらのことから、これまでは第4学年であったものを、今回の改訂では、第3学年の事項とし、ローマ字を使った読み書きがより早い段階においてできるようにしている。「日常使われている簡単な単語」とは、地名や人名などの固有名詞を含めた、児童が日常目にする簡単な単語のことである。

一方、平成29年告示『小学校学習指導要領解説 国語(第3章 第2節)』(文科省2017:78-79)では以下のような記述となり、分量が増え、より詳細になっている。

ローマ字で表記されたものを読み、ローマ字で書くことは、ローマ字での読み書きについて示したものである。ローマ字表記が添えられた案内板やパンフレットを見たり、コンピュータを使ったりする機会が増えるなど、ローマ字は児童の生活に身近なものになっていることなどを踏まえ、第3学年で指導するものとする。日常使われている簡単な単語とは、地名や人名などの固有名詞を含めた、児童が日常目にする簡単な単語のことである。ローマ字の表記に当たっては、「ローマ字のつづり方」(昭和29年内閣告示)を踏まえることとなる。ここでは、「一般に国語を書き表す際には第1表に掲げたつづり方によるものと」し、「従来の慣例をにわかにかがめたい事情にある場合に限り、第2表に掲げたつづり方によっても差し支えない」とされている。第1表(いわゆる訓令式)による表記の指導に当たっては、日本語の音が子音と母音の組み合わせで成り立っていることを理解することが重要である。第2表(いわゆるヘボン式と日本式)による表記の指導に当たっては、例えば、パスポートに記載される氏名の表記など、外国の人たちとコミュニケーションをとる際に用いられることが多い表記の仕方を理解することが重要である。

平成29年度の学習指導要領解説では、平成20年度の解説には見られなかった「表記法を昭和29年内閣告示に依拠する」という趣旨の文言や、訓令式とヘボン式それぞれの使用目的についても言及されている。こういった変化は2020年から本格実施される学習指導要領から、小学校で「教科としての英語」が始まり、英語の文字の読み書きが高学年に取り入れられたことに由来するという分析もある(高松・浦野 2019:66-67)。

明治時代に民主的思想の高まりとともに発展したローマ字運動は、太平洋戦時中は国家による民族意識の高揚政策により衰退した。しかし戦後は民主化を推進するという名目で、アメリカ教育使節団がローマ字の国字採用を勧告し、紆余曲折を経て文部省は「ローマ字教育の指針」「ローマ字文の書き方」を定め、昭和22年の学習指導要領(試案)によって全国の小中学校でローマ字の指導が行われることとなった。表1を見るとわかるように、ローマ字の扱いは昭和43年告示の学習指導要領から「文章の読み書き」が「単語(の読み書き)」に変化し、軽い扱いとなっている。これは当時ローマ字の扱いも含めて国語国字問題を話し合っていた国語審議会において、ローマ字推進派の土岐善磨会長がその職から退いたこととの関係も示唆されている(安田 2007)。そして令和4年現在、グローバル化やICTの普及促進の波を受けて、日本の教育は時代に合わせた変化を求められている。特に小学校段階からキーボードによるローマ字入力必要性が生じる中で、再びローマ字教育のあり方が注目を浴びるようになってきていると言える。

表1 学習指導要領における位置づけの変遷

学習指導要領	指導開始学年	指導目標
昭和22年(試案)	第4学年以上	ローマ字の文章の読み書き
昭和26年(試案)	第4学年以上	ローマ字の文章の読み書き
昭和33年告示	第4学年以上	ローマ字の文章の読み書き
昭和43年告示	第4学年	日常ふれる程度の簡単な単語
昭和52年告示	第4学年	日常使われる簡単な単語の
平成元年告示	第4学年	日常使われる簡単な単語
平成10年告示 平成15年一部改正	第4学年	日常使われている簡単な単語
平成20年告示 平成27年一部改正	第3学年	日常使われている簡単な単語
平成29年告示	第3学年	日常使われている簡単な単語

(筆者作成)

### 3.2 教科書会社別年間指導計画におけるローマ字の扱い

本節では小学校現場でのローマ字指導実態を把握するため、小学校3年生の検定教科書について、教科書会社が提供している年間指導計画からローマ字指導の概要を見ていくことにする。分析対象は光村図書、東京書籍、教育出版、そして学校図書の教科書である。

4社における第3学年でのローマ字指導時間数は平均3.25時間で、その内訳は光村図書と教育出版が4時間、東京書籍と学校図書が3時間となっているが、コンピュータ入力の時間を合わせると、光村図書が6時間、東京書籍・教育出版・学校図書は5時間となる。

ローマ字の指導時期は東京書籍が最も早く6月、続いて光村図書が9月、教育出版・学校図書は10月となっている。

#### (a) 光村図書『国語 三上 わかば』・『国語 三下 あおぞら』

光村図書の年間指導計画において、ローマ字の指導は10月に行われ、指導時間数は4時間が当てられている。

課の構成は「①アルファベットの筆順 ②身の回りのローマ字表記(写真) ③ローマ字表 ④ローマ字表の見方 ⑤ローマ字のきまり(きゃ・きゅ・きょ) ⑥のぼす音 ⑦つまる音 ⑧はねる音 ⑨大文字・小文字 ⑩二つの書き方(ヘボン式と訓令式)」となっている。光村図書の特徴は、課の冒頭に「アルファベットの筆順」を掲載している点である。これは他の3社(東京書籍・教育出版・学校図書)には見られない。ただし、東京書籍は巻末に掲載している。

コンピュータのローマ字入力『国語 三下 あおぞら』において2月に行われ、指導時間は2時間である。見開き2ページで、課の構成は「①入力の説明 ②「し」「ち」「ふ」の入力 ③「ぢ」「づ」「を」「ん」の入力 ④のぼす音 ⑤つまる音 ⑥変換」となっている。

#### (b) 東京書籍『新しい国語 三上』・『新しい国語 三下』

東京書籍は、4社の中で最も早い6月にローマ字指導を行い、指導時間数は3時間である。課の構成は「①身の回りのローマ字(写真) ②ローマ字表の見方 ③ローマ字表 ④ローマ字の書き方 ⑤のぼす音 ⑥小さい「ゃ、ゅ、ょ」 ⑦つまる音 ⑧はねる音 ⑨大文字・小文字 ⑩二つの書き方(訓令式とヘボン式)」となっている。

他社のローマ字の単元は巻末にあるのに対し、東京書籍においては上巻のpp.80-85にローマ字の課が置かれている。巻末には「アルファベットの筆順」を記したローマ字の書き方の表を掲載している。

コンピュータ入力は『新しい国語 三下』で扱っており、教科書pp.24-25にある。課の構成は「①ローマ字の復習 ②ローマ字を使った入力 ③二つの書き方がある場合 ④ローマ字との書き方の違い「ぢ」「づ」「を」「ん」 ⑤のぼす音」となっている。

#### (c) 教育出版『ひろがる言葉 小学国語 三上』

教育出版の年間指導計画では、ローマ字指導は『ひろがる言葉 小学国語 三上』のみで10月に行われ、指導時間数は4時間である。課の構成は「①ローマ字表の見方 ②ローマ字で書かれた言葉を読む ③のぼす音 ④はねる音 ⑤つまる音 ⑥大文字・小文字 ⑦二つの書き方」であるが、他社に見られる小さい「ゃ、ゅ、ょ」がこの課では扱われていない。

コンピュータ入力も同じく10月に行われる。課の構成は「①身の回りのローマ字(写



真) ②ローマ字表の見方 ③ローマ字表 ④ローマ字の書き方 ⑤のぼす音 ⑥小さい「ゃ、ゅ、ょ」 ⑦つまる音 ⑧はねる音 ⑨大文字・小文字 ⑩二つの書き方」となっている。

(d) 学校図書『みんなと学ぶ 小学校国語 三年上』・『みんなと学ぶ 小学校国語 三年下』学校図書のローマ字指導は10月に行われ、指導時間数は3時間である。

課の構成は「①ローマ字表 ②身の回りのローマ字(写真) ③ローマ字表の見方 ④ローマ字の読み方 ⑤つまる音 ⑥小さい「ゃ・ゅ・ょ」 ⑦はねる音」となっている。

他社の上巻で扱っている二つの書き方(訓令式とヘボン式)と大文字・小文字、コンピュータのローマ字入力、『みんなと学ぶ 小学校国語 三年下』でまとめて扱われている。課の構成は「①ローマ字表 ②大文字と小文字 ③二通りの書き方 ④コンピュータのローマ字入力」となっている。ローマ字入力の指導は「①「し」「ち」「ふ」の入力 ②「ぢ」「づ」「を」「ん」の入力」のみで、半ページの扱いである。

### 3.3 考察

国語科で使用されている検定教科書は4社であるが、教科書を比較・分析した結果、出版社ごとの特徴が言葉選び、構成、指導計画などに現れていることがわかった。

3年生の児童は、複雑なローマ字のルールに加え、アルファベットの大文字・小文字の読み書きを平均3.25時間の授業時間内に行い、さらにコンピュータ入力では、2種類の入力方法(訓令式とヘボン式)に加えて、パソコン式の入力方法も習得する必要がある、相当な負担があると考えられる。各教科書にはローマ字の書き方が2つあるものは、どちらのやり方でも入力できる旨が記されていて、どちらを使ってもよいとされる。しかし、地名・人名などの固有名詞はヘボン式での表記が求められていることを考えると、ヘボン式での入力に統一したほうが混乱を減らすことができると考えられる。

また3年生で外国語活動が必修になったことで、外国語としてのアルファベットが導入されるのと同時期に、国語科では日本語としてのローマ字が指導される。このあたり、先行研究でも評価が分かれるところで、山本・池本(2017)は、先行研究の分析から英語の音韻指導におけるローマ字の弊害が明らかになったと述べているが、一方で、高松・浦野(2019)は複雑な英語の綴りと音の関係を生徒に理解させるためにローマ字を活用し、英語入門期の指導を工夫するほうが有効だと述べている。銘苅(2020)はローマ字で音声の仕組みや操作について理解させることが、英語の読み書き指導のレディネスを整える可能性が示唆されたと指摘している。筆者の立場は、ローマ字学習は必ずしも英語学習の阻害要因にはならないというもので、そのためにはローマ字学習に先行して、日本語の音韻を意識した指導が必要だと考える。

たとえば、光村図書の年間指導計にある1年生のひらがな指導において、あいうえおの歌や音読など、音声を意識的に取り入れた指導が提案されていることから、1年生のひらがな指導の段階から日本語の音声(母音を除き、子音と母音の組み合わせ)からできているといった日本語の音韻を意識した指導を行うべきであろう。そして3年生のローマ字学習までにローマ字指導のレディネスを整え、3年時に始まる外国語活動では、4月のスタート時よりフォニックスを組み合わせたアルファベットソングを導入するなどが効果的であると考えられる。

## 4. 外国語活動・外国語科におけるアルファベット指導

### 4.1 学習指導要領における位置づけ

平成 29 年告示「小学校学習指導要領 解説 外国語（以下、「解説」と略記）」（文科省 2017:86）では、アルファベット指導について高学年の外国語科においては、国際的な共通語として英語を使用する観点から、できるだけ日本語の原音に近い音で、英語を使用する人々に再現してもらうために、第 2 表に掲げた綴り方のうち、いわゆる「ヘボン式ローマ字」で表記することを指導すると示されている。同じく「解説」（p.133）では、小学校第 3 学年の国語科において日本語のローマ字表記が扱われていることを踏まえ、特に a, e, i, o, u などの母音字について、日本語のローマ字表記の読み方と英語の文字の名称の読み方が異なることに留意して指導することが必要であると記されている。さらに、平成 29 年告示の学習指導要領（p.88）では次の様に明記されている。

小学校第 3 学年の国語科において日本語のローマ字表記が指導されていることを踏まえ、指導の工夫をすることが必要である。

また、「学習指導要領」には、外国語活動の課題とローマ字学習における日本語の音韻意識とが共通することについても記載されている。小学校では平成 23 年度から高学年において外国語活動が導入され、その充実により、児童の高い学習意欲、中学生の外国語教育に対する積極性の向上といった成果が認められる一方で、①音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習意欲に円滑に接続されていない、②日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題があると指摘されている。また、日本語の音声の特徴を意識させながら、外国語を用いたコミュニケーションを通して、日本語の使用だけでは気づくことが難しい日本語の音声の特徴や言葉の仕組みへの気づきを促すことにより、日本語についての理解を深めることができるとし、さらに、このことは言葉の豊かさに気づかせ、外国語学習への意欲の向上や、高学年の外国語科で育成を目指す資質・能力の向上にも資すると考えられると記されている（文科省 2017:12）。

外国語活動での文字の取扱いについては、次のように記載されている。中学年の外国語活動では、文字の名称の読み方を扱い、文字に慣れ親しませ、高学年の外国語科における文字の指導と連携させるとともに、文字の名称レベルに指導を留めることに留意する必要がある。ただし、中学年の外国語活動で活字体の大文字・小文字に出会い、文字を使ってコミュニケーションを図った経験が、高学年の外国語科における「読むこと」、「書くこと」に円滑につながるようにする必要がある（文科省 2017:50）。「推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたり」としているのは、外国語科として言語能力向上の観点から言葉の仕組みの理解などを促すため、英語の文字や単語などの認識、日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気づき、語順の違いなど文構造への気づきなどが求められたことに対応したものである。「推測しながら読む」とは、中学年から単語の綴りが添えられた絵カードを見ながら何度も聞いたり話したりしてその音声に十分に慣れ親しんだ単語が文字のみで提示された場合、その単語の読み方を推測して読むことを表している（文科省 2017:72）。

### 4.2 現場の指導実態

本節では小学校現場での指導実態を把握するため、以下の点から検証を行う。まず、中学年の外国語活動の年間指導計画と高学年の検定教科書の年間指導計画から、アルファベットの指導実態を見ていくことにする。

#### 4.2.1 教材・教科書の年間指導計画から

(1) 3, 4年生の外国語活動の指導計画におけるアルファベットの扱い

中学年である3, 4年生の外国語活動は必修ではあるが教科ではないため、検定教科書の類は存在せず、「小学校外国語活動教材」という位置づけで、文科省が著作権を有し、東京書籍が発行している。書名は3年生用が『Let's Try 1』で、4年生用は『Let's Try 2』となっており、年間指導計画などは文科省のホームページで閲覧が可能である。

中学年の外国語活動は3, 4年生で年間各35コマ、読み、書きについての指導はされず、3年生の『Let's Try 1』のUnit 6からUnit 9でアルファベットの大文字、4年生の『Let's Try 2』で大文字の復習と小文字の導入を行っている。しかし、3年生の教材である『Let's Try 1』に掲載されている英単語は未習のはずの小文字で表記をされていることは注目しておきたい。なお、中学年で使用する教材では、フォニックスについての言及はない。

(2) 5, 6年生の教科書会社の指導計画におけるアルファベットの扱い

高学年である5, 6年生については、外国語科として正式な教科になっており、2018年からの移行期間となる2年間は文科省による『We Can! 1・2』が使用されたが、その後に発行された7社の検定教科書を分析した。5, 6年生の英語の授業時間は年間各70コマである。

(a) 三省堂『CROWN Jr.』

CROWN Jr. 5での指導は、Lesson 1は「大文字と小文字の名前を読む」、「ローマ字で自分の名前を書く」となっている。Lesson 2は「英語の文字に音があることに気づく」、Lesson 3以降では「アルファベットの音を聞いて、リズムに合わせて発音すること」を指導する。

CROWN Jr. 6でも引き続き、音を聞いてリズムに合わせて発音をさせ、さらに音声聞きイラストを頼りに英語を読む指導をする。

(b) 啓林館『Blue Sky elementary』

Blue Sky elementary 5では、Pre Unitでは「自分の名前のアルファベットを名前読みする」、Unit 1は「大文字と小文字の形が同じアルファベットを識別し、名前読みしたり、書き写したりする」、そしてUnit 2からUnit 5で「小文字の形に注目してアルファベットを識別し、名前読みしたり、書き写したりする」技能を身につける指導をする。また、Unit 6からUnit 8では「アルファベットには2つの読み方があることを理解し、読んだり、書き写したりする」他、年間を通した学習活動として、JingleやChantを指導している。

Blue Sky elementary 6では、Unit 1からUnit 4で「アルファベット1文字の音読みについて理解し、聞き取ったり、そのアルファベットを書いたりする」、Unit 5で「ch, sh, th, whの発音」について指導している。また、Unit 6で母音について指導している。

(c) 教育出版『ONE WORLD Smiles』

ONE WORLD Smiles 5では、Lesson 1で「アルファベットの活字体の大文字」を、Lesson 2で「小文字」を読んだり、書いたりすることができることを目標としている。Lesson 5で「自分の氏名をへボン式ローマ字で書くことができる」指導をし、Lesson 3からLesson 8で「英語とカタカナ語の発音の違い (bとp, tとd, sとz, mとn, bとv)」や「アルファベットの音とつづり・聞き取り・発音」を指導する。

ONE WORLD Smiles 6では、Lesson 1で、残りの子音について指導している。Lesson 2からLesson 6で母音について指導する。Lesson 7で、hとsh, Lesson 8でthとs, Lesson 9でthとz

について指導をしている。

(d) 開隆堂『Junior Sunshine』

Junior Sunshine 5 Lesson 1で「活字体の大文字を書いたり、ヘボン式ローマ字で自分の名前を書いたりすること」を指導している。Lesson 2で「活字体の大文字の形の違いを理解し、発音することと書くことができる」よう指導している。Lesson 3とLesson 4では、文字には「音読み」（いわゆる「アブクド読み」）があることを理解し、活字体の小文字を識別したり、「名称読み」で発音したりすることができるように指導される。また、活字体の小文字を形に気をつけて書くことができるよう指導がなされる。Lesson 5で「身近な単語のはじめの音を聞き分けたりすることができる」、Lesson 7で「アルファベットの『音読み』を聞いて、その音に対応する小文字を識別することができる」ことを指導する。Lesson 8では「アルファベットの『音読み』を聞いて、その音から文字を想起したりすることができる」ように指導し、最後のLesson 9では「綴りを見たり音声を聞いたりして、その文字で始まる単語やそれが表す単語を選び、発音することができる」ことを目標としている。

Junior Sunshine 6 Lesson 2では「単語のはじめの音を聞き取り、それが示す文字を含む単語を識別することができる」、そしてLesson 4では「単語のはじめの音を聞いて、小文字を正しく選び取ることができる」を目標としている。

(e) 光村図書『Here We Go!』

Here We Go! 5では、Unit 1で、大文字の仲間わけやなぞり書きを指導する。Unit 2の活動では、小文字の仲間わけやなぞり書きを指導する。Unit 3で大文字から小文字への変化を考えさせ、Unit 4でアルファベットを使った線つなぎ（アルファベットを順に線でつないでいくと絵が浮かび上がる）などの活動をさせる。

Here We Go! 6では、Unit 1で「単語の初めの文字を書く」、Unit 2では「単語の初めの文字を書く。英語になった日本語を選び、ローマ字で書く」、Unit 3では「文字遊び、英語の歌、アルファベットビンゴ」を、そしてUnit 4では「文字をつないで単語を作る指導」をする。

(f) 東京書籍『NEW HORIZON Elementary English Course』

NEW HORIZON Elementary English Course 5では、Unit 1で活字体の大文字、Unit 2で活字体の小文字を読んだり、書いたりさせ、Unit 3で、活字体の大文字・小文字を読んだり、書いたりする活動を行う。Unit 4で「複数の大文字の名前を聞いて書く。アクセントに慣れ親しむ」、Unit 5で「複数の小文字の名前を聞いて書く。アクセントや単語の始まりの音に慣れ親しむ」、Unit 6は「複数の小文字の名前を聞いて書く。単語の始まりの音や終わりの音に慣れ親しむ」、Unit 7で「Animals Jingleを聞いたり、歌ったりする」、そしてUnit 8で「Food Jingle を聞いたり、歌ったりする」という指導が記載されている。

NEW HORIZON Elementary English Course 6では、Unit 1からUnit 4で「最初の音が共通の単語の音声を聞いたりして、英語の音に慣れ親しむ」、Unit 5とUnit 6で「単語の音声を聞いて、単語を書いたり、絵に合う文字を線で結んだりして英語の音に慣れ親しむ」Unit 7で「初めの音が二文字で一つの音になる単語の音声を聞いたりして、英語の音に慣れ親しむ。Unit 8では『名前読み』となる音を含む単語の音声を聞いたりして、英語の音に慣れ親しむ」ことを目標としている。

#### (g) 学校図書『JUNIOR TOTAL ENGLISH』

JUNIOR TOTAL ENGLISH Book1 (5年生用)では、pre Lessonで「アルファベットの名称を聞いて判別できる。ヘボン式のローマ字の書き方がわかる」、Lesson 1で「アルファベットの大きい文字と小さい文字を名前で読み、書くことができる」、Lesson 2で「アルファベットの名前と音のちがいに気づき、大きい文字と小さい文字を書くことができる」、Lesson 3からLesson 8で「aからzを使った単語の音と文字の関係に気づく」指導をaから順に分割して行うことにしている。Lesson 8からLesson 10で「chとshなどのアルファベットが2文字続く場合の読み方」の指導をしている。

JUNIOR TOTAL ENGLISH Book 2 (6年生用)では、pre Lessonで「アルファベットの名称を聞いて判別できる。ヘボン式のローマ字の書き方がわかる」、Lesson 1からLesson 5で「aからzを使った単語の音と文字の関係に気づく指導をaから順に分割して行うことにしている。Lesson 6からは「sh, th, wh, chが含まれる単語の音と文字の関係に気づく」、同様に、Lesson 7で「sh, th, ck, tch」、Lesson 8で「p, t, d, c」、Lesson 9で「k, g, s, m」、Lesson 10で「n, l, f, x」についての指導をする。

### 4.3 考察

学習指導要領では日本語の音声と英語の音声の違いについて気づかせることの重要性が述べられているが、日本語の音声についての指導を3年生の国語科のローマ字指導のみに任せるのではなく、外国語活動・英語科においても、日本語の音声の特徴について気づかせる指導をすることが重要である。国語科と英語科の双方向からアプローチすることにより、中学校の段階で英語の音声から文字へ移行する際の学習意欲の接続、英語の発音と綴りの関係につながる指導を可能にできると考える。

外国語活動では、文字の書き方指導はしないが、その一方で、国語科では3年生のローマ字指導で大きい文字と小さい文字の書き方を指導している。また、文科省のギガスクール構想によって、小学校1, 2年生という低学年でのキーボード入力も必要となっているのが現状である。ローマ字が児童に以前より身近になっている現状を踏まえ、一方で、キーボード入力後はローマ字表記が残らないという実態にも注意しつつ、早急な指導の整理や工夫が必要だろう。

小学校低学年の帯活動でアルファベットジングルを導入し、国語科で日本語の音韻とローマ字指導、外国語活動でまずはローマ字読みがそのまま英語の読みになっている英単語を読む指導をし、外国語科でフォニックスの導入後、ローマ字読みでは読めない英単語の読み方を指導することで、日本語の音と英語の音の違いにより理解を深めることができると考える。

ヘボン式も含めローマ字そのものが英語の音韻指導における弊害となっているという先行研究も存在するが、一方でローマ字の知識が英語学習に正の転移をもたらし得るという研究もある。小学校3年生という時期に、本来ローマ字は英語表記のためのものではなく、あくまで日本語を表記するために存在することを明示的に教えつつ、英語の音韻指導と日本語の音韻指導を絡ませた指導を構築する必要がある。ヘボン式ローマ字導入は、英語の音に触れる体験の後に行うといった、カリキュラム上の工夫も必要であろう。

松本・大友(2020)は、日本語の音の子音と母音の組み合わせで成り立っていることを理解することが重要であると述べている。国語科で日本語の音韻を意識したローマ字指導を行い、外国語活動や英語科で、ローマ字読みができる単語を学習することによりローマ字の定着、英語の読みにつながることを期待される。英語科では、国語科で学習した日本語の音の子音と母音の組み合わせであるという知識を利用して、英語は子音だけの音を

出す単語もあることを指導していくと、英語がローマ字読みになってしまうという問題が緩和されると考える。国語科と英語科の連携をはかることにより、ローマ字学習が児童にとって英語を学ぶ上で多いに助けになると期待される。

## 5. 現場におけるアルファベットとローマ字の指導実態

本章では小学校の現職教員に対して、国語科と外国語活動・外国語科におけるローマ字とアルファベットの指導について質問紙調査を行った。質問紙調査とアンケート対象者の概要は以下の通りである。なお、質問紙は巻末資料に付しておく。

### 5.1 質問紙調査の概要

#### 5.1.1 質問紙調査の実施期間

質問紙調査による小学校における国語科と外国語活動・外国語科におけるローマ字とアルファベットの指導実態の調査は、2021年11月25日から12月3日にかけて実施した。

#### 5.1.2 質問紙調査の実施方法

質問紙の作成、および回答作業は、すべて Web 上で実施が可能な CustomForm (<https://customform.jp/>) というサービスを利用した。このサービスは自由にアンケートフォームを作成することができる上、基本的な機能の使用だけならば無料である。サービスが提供されているサイトにアクセスし、そこでアンケートフォームを作成すると、公開用の URL が発行されるので、メールや SNS に貼り付けて回答者に送信し、回答者は自身の PC やスマートフォンなどから URL にアクセスし、回答することができる。回答者の匿名性が保証され、無料でありながらも、簡易集計や自由記述の一覧も作成してくれる。

#### 5.1.3 回答者の募集方法とプロフィール

本稿筆者の知人である小学校教員に依頼し、CustomForm で作成した回答用 URL を友人・知人の小学校教員に拡散してもらった。その結果、東京都葛飾区、千葉県千葉市、千葉縣市原市、神奈川県川崎市、神奈川県横浜市、山形県米沢市、和歌山県海南市にある公立小学校教諭 34 名からの回答を得ることができた。

### 5.2 質問内容と結果

各質問項目と回答結果は以下の通りである。

① あなたの現在のご担当学年を教えてください。【必須】								
1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別学級	英語専科	その他 <sup>4</sup>
4	6	3	5	5	2	5	1	3

② あなたの年代を教えてください。【必須】			
20代	30代	40代	50代
17	1	10	6

<sup>4</sup> 「その他」には「特別支援学校勤務」、「教務主任」、「専科」の回答が記入されていた。

③ 小学校3年生に対するローマ字指導経験がありますか。【必須】「いいえ」は⑩番の質問へ	
はい	いいえ
27	7

④ 小学校3年生でのローマ字の指導は必要だと思いますか。【任意】	
はい	いいえ
24	4

④' ④の理由を教えてください。【任意】
<ul style="list-style-type: none"> <li>・はい→パソコンなどのキーボード入力が必要だから [同様のコメントは計19件]</li> <li>・はい→英語の導入になるから [同様のコメントは計2件]</li> <li>・いいえ→3年生から外国語活動の学習をするため混同してしまう [同様のコメントは計2件]</li> </ul>

⑤ ローマ字を導入する時、日本語の音韻を意識した導入をしている <sup>5</sup> 。【任意】				
1. とてもそう思う	2. そう思う	3. どちらでもない	4. そう思わない	5. まったくそう思わない
15	9	4	0	0

⑥ 現在、3年生でローマ字の導入と同じ時期にアルファベットを導入しますが、アルファベットは何年生で導入するのがよいと思いますか。【任意】					
1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
9	4	15	0	0	0

⑦ ローマ字を定着させるのに授業時間数は十分だと思う。【任意】				
1. とてもそう思う	2. そう思う	3. どちらでもない	4. そう思わない	5. まったくそう思わない
1	0	6	15	6

⑧ ローマ字を扱う時にパソコンなどのキーボード入力を意識した指導をしていると思う。【任意】				
1. とてもそう思う	2. そう思う	3. どちらでもない	4. そう思わない	5. まったくそう思わない
13	8	4	3	0

<sup>5</sup> 質問文の直下に「たとえば、日本語の『か』は『k』と『a』という2つの音から成り立っていることを意識させる指導です」という説明文を補足しておいた。

⑨ 国語の授業で、ローマ字を扱う時に英語の授業の指導内容も意識するべきだと思う。【任意】				
1. とてもそう思う	2. そう思う	3. どちらでもない	4. そう思わない	5. まったくそう思わない
5	9	9	5	0

⑩ 3年生・4年生の外国語活動でも、ローマ字についてふれるべきだと思う。【必須】				
1. とてもそう思う	2. そう思う	3. どちらでもない	4. そう思わない	5. まったくそう思わない
5	11	7	8	3

⑪ 5年生・6年生でローマ字がまだ定着していない児童がいると思う。【必須】				
1. とてもそう思う	2. そう思う	3. どちらでもない	4. そう思わない	5. まったくそう思わない
14	18	2	0	0

⑫ 5年生・6年生の外国語科の授業で、ヘボン式ローマ字を扱う総時間数は?【必須】				
1. 0時間	2. 2時間未満	3. 2時間以上3時間未満	4. 3時間以上4時間未満	5. 4時間以上
13	11	6	1	3

⑬ 5年生・6年生の外国語科の授業で、ヘボン式ローマ字を扱う総時間数は足りていると思う。【必須】				
1. とてもそう思う	2. そう思う	3. どちらでもない	4. そう思わない	5. まったくそう思わない
0	3	20	8	3

⑭ ローマ字の習得は英語の学習に役に立つと思う。【必須】				
1. とてもそう思う	2. そう思う	3. どちらでもない	4. そう思わない	5. まったくそう思わない
6	19	5	3	1

⑮ ローマ字指導で、大文字と小文字を同時に教えるべきだと思う。【必須】				
1. とてもそう思う	2. そう思う	3. どちらでもない	4. そう思わない	5. まったくそう思わない
8	13	6	6	1

⑯ ローマ字指導は国語科と外国語科が連携して行うべきだと思う。【必須】				
1. とてもそう思う	2. そう思う	3. どちらでもない	4. そう思わない	5. まったくそう思わない
10	17	4	2	1



⑰ デジタル端末が配布されたことで、ローマ字指導の変化が生じていると思う。【必須】				
1. とてもそう思う	2. そう思う	3. どちらでもない	4. そう思わない	5. まったくそう思わない
13	15	6	0	0

⑱ 国の方針に従い、訓令式ローマ字を優先して指導するべきだと思う。【必須】				
1. とてもそう思う	2. そう思う	3. どちらでもない	4. そう思わない	5. まったくそう思わない
1	5	20	6	2

⑱' ⑱の理由を教えてください。【任意】

**2. そう思う**

- ・ギガスクール構想での児童の情報機器操作ではローマ字の理解が欠かせない考えるため。

**3. どちらでもない**

- ・色々いっきに扱おうとごちゃまぜになってしまうから。優先するというよりは、段階をおって理解を図れば良いと思う。
- ・自分が訓令式を理解していない。
- ・現代社会の使用頻度にそぐわないから。
- ・パソコンのローマ字入力で書きたいことや調べたいことに正しく変換できればよいから。

**4. そう思わない**

- ・日常生活で見たことがあまりないから。
- ・タブレット入力のためには、必ずしも訓令式である必要はないと思う。
- ・訓令式はあまりにも日本国内での使用に限定された前提で作られているような印象を受ける。へボン式を習得しておいた方が、英語の発音の理解にスムーズにつながるのではないかと。ただ、小学校段階でそこまで扱うのは難しいとも考える。
- ・外国語との関連がないから。
- ・英語の発音に近い方がいいと思います。
- ・へボン式の方が一般的に使われているので。

**5. まったくそう思わない**

- ・今の時代にあっていない。世界に通用しない。
- ・児童に混乱をもたらす。英語嫌いにさせる。

### 5.3 考察

まず、質問④「小学校3年生でのローマ字の指導は必要だと思いますか」については、「はい」が34人中24人で、その理由としては「パソコンなどのキーボード入力が必要」が計19件であった。やはりギガスクール構想の影響で、小学校低学年から何らかの形でキーボード入力をする必要が出てきていることが大きいと思われる。これは質問⑰「デジタル端末が配布されたことで、ローマ字指導の変化が生じていると思う」の回答結果（「とてもそう思う」・「そう思う」が28名）からも補強される。

次に、質問⑥「現在、3年生でローマ字の導入と同じ時期にアルファベットを導入しますが、アルファベットは何年生で導入するのがよいと思いますか」に対する回答で、小学校3年生よりも早い段階でアルファベットを導入するべきであるとしている回答が13名であった（1年生が9名、2年生が4名）。同じラテン文字をまるで別の文字と誤解させるように、国語科では「ローマ字」として教え、外国語活動では「アルファベット」として教えることへの問題提起と本稿筆者らは考えている。古代ローマ帝国の文字を借り、日本語を書き表したり、英語を書き表したりするために使っているという事実関係をわかりやすく正確に理解させることが必要であると考ええる。

さらに、質問⑩「5年生・6年生でローマ字がまだ定着していない児童がいると思う」に対する回答として「とてもそう思う・そう思う」が32名あったことは、質問⑭「ローマ字の習得は英語の学習に役に立つと思う」の回答で肯定的な回答「とてもそう思う・そう思う」が25名であったことを勘案して、非常に重要な示唆となっていると筆者らは考えている。「1.1 研究の背景」でも指摘したが、我々の最終的な興味・関心の対象である「英語を苦手とする児童・生徒は共通してローマ字にも問題や苦手意識を抱えている」という経験知の因果関係を明らかにするためにも、今後注意深く検討・検証していく必要がある。

そして、質問⑯「ローマ字指導は国語科と外国語科が連携して行うべきだと思う」の回答によると34名中27名の教員がローマ字指導は国語科と英語科が連携して行うべきだと感じていることから、3, 4年生の国語科と外国語活動、5, 6年生の英語科の役割を明確にして、連携をはかった上での指導が望ましいということになるだろう。国語科では日本語の音韻を意識したローマ字指導を実施し、3, 4年生の外国語活動ではローマ字読みで読める英単語を導入することにより、国語科と英語科でローマ字の定着を図ることが可能であると考ええる。また、外国語活動においても、フォニックスを導入することで、国語科で学んだ子音の音と一致する音があることに気づき、英単語を読む手助けとなると考える。

最後に、質問⑱「国の方針に従い、訓令式ローマ字を優先して指導するべきだと思う」についてであるが、「とてもそう思う・そう思う」という回答者が6名で、「そう思わない・まったくそう思わない」が8名、そして「どちらでもない」が20名という結果であった。「訓令式ローマ字」の指導について反対派がやや多い程度かとも一見思われるが、この「どちらでもない」の20名の自由記述による理由を見ていくと、訓令式はやや分が悪いように思われる。1954（昭和29）年の内閣告示・内閣訓令以来、70年近くが過ぎようとしている現在、中学年での英語活動の必修化、および高学年での外国語科（英語）の教科化が実施されている実態を鑑みると、ローマ字表記の指導において訓令式ローマ字表記を優先すべき積極的な理由が見当たらないのである。

## 6. おわりに

### 6.1 結論

本稿では研究の目的を以下の3つ、すなわち、(1)ローマ字成立の経緯を明らかにする、(2)ローマ字とアルファベットの指導実態を明らかにする、そして(3)国語教育と英語教育の連携の方向性を明らかにする、に設定していた。これら研究の目的を達成するため、まず、第2章ではローマ字の成立過程を通時的に瞥見した。次に、第3章において国語科と英語科それぞれについて、学習指導要領でのローマ字とアルファベットの扱いを精査した。そして、第4章では、小学校教員に対して質問紙調査を実施し、現場での受け止め方や対応について調査した。結論として、内閣訓令に基づくローマ字表記の規定や在り方は

時代に合わなくなっており、また、現場の声からも早急の対策が必要であることが分かった。具体的には、小学校中学年からの外国語教育の必修化とギガスクール構想に基づくキーボード入力必要性、さらには児童の負担を考慮しての改革が望まれる。本稿における暫定的な改革案としては、国語科におけるローマ字指導では、ヘボン式ローマ字表記を優先して指導し、ここにキーボード入力における例外（撥音「ん」を n+n で打つことなど）を適宜指導するべきであろう。

## 6.2 今後の課題

今後の課題として、まず、ローマ字とは何かという指導の仕方、たとえば、「古代ローマ帝国の文字を借り、日本語を書き表したり、英語を書き表したりするのに使う」という事実関係をわかりやすく正確に理解させる方法を考案することが挙げられる。小学校低学年でも理解できるような例も検討する必要がある。次に、国語科と英語科との具体的な連携方法が示されたシラバスの作成、そしてそのシラバスを実践しての効果測定も必要である。イデオロギーの問題としてではなく、児童にとって本当に何が必要であるのか、不必要に過重な負担は与えていないかという視点から、ローマ字表記について今後も検証と検討を続けていきたいと切に願う。

## 引用文献

- 日下部文夫(1977)「8 日本のローマ字」、『岩波講座 日本語 8 文字』, 岩波書店, pp.341-383.  
古藤友子(1997)『日本の文字のふしぎふしぎ』, アリス館.  
鹿間由美(2021)「混乱させない!ローマ字学習」, 講演配布資料.  
新村出編(2018)『広辞苑 第7版』, 岩波書店.  
杉本つとむ(1998)『日本語研究の歴史』, 八坂書房.  
杉山滋郎(2008)「科学者たちの選択:ローマ字運動の歴史が科学技術コミュニケーションに示唆するもの」,『科学技術コミュニケーション』第3号, 北海道大学, pp.61-86.  
高松理英子・浦野研(2019)「小学校ローマ字学習の現状と課題:英語・国語・総合的な学習の連携を目指して」,『北海学園大学学園論集』(178), 北海学園大学, pp.65-90.  
松浦伸和(2005)「入門期におけるローマ字力と英語学力の関係」,『日本教科教育学会誌』第28巻 第2号, 日本教科教育学会, pp.81-89.  
松本由美・大友美奈(2019)「ローマ字指導を援用した小学校英語の文字指導の試案」,『玉川大学教育学部紀要』第19号, 玉川大学, pp.69-87.  
銘莉美土(2020)「小学生児童の英語の読み書き学習のレディネスに関する予備的研究ローマ字と英語の語彙知識との関連における検討」,『帝京大学教職センター年報(7)』, 帝京大学, pp.41-47.  
文部科学省(2018)「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編」.  
安田敏朗(2007)『国語審議会—迷走の60年』, 講談社.  
山本玲子・池本淳子(2017)「英語学習につながるヘボン式ローマ字学習のための教材開発」,『小学校英語教育学会誌』17巻, 小学校英語教育学会, pp.38-53.  
文部科学省(2008)『平成20年告示 小学校学習指導要領解説 国語』, 文部科学省.  
——(2017)『平成29年告示 小学校学習指導要領解説 国語』, 文部科学省.

## 分析教科書

### □ 国語教科書

- 学校図書 (2019) 『みんなと学ぶ 小学校国語 三年上・下』
- 教育出版 (2019) 『ひろがる言葉 小学国語 三上』
- 東京書籍 (2019) 『新しい国語 三上・下』
- 光村図書 (2019) 『国語 三上 わかば』・『国語 三下 あおぞら』

### □ 英語教科書

- 開隆堂 (2021) 『Junior Sunshine 5・6』
- 学校図書 (2021) 『JUNIOR TOTAL ENGLISH 1・2』
- 教育出版 (2021) 『ONE WORLD Smiles 5・6』
- 啓林館 (2021) 『Blue Sky elementary 5・6』
- 三省堂 (2021) 『CROWN Jr. 5・6』
- 東京書籍 (2021) 『NEW HORIZON Elementary English Course 5・6』
- 光村図書 (2021) 『Here We Go! 5・6』